
olive eyes

SEYLA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

olive eyes

【Nコード】

N7079N

【作者名】

SEYLA

【あらすじ】

こんな変な人、誰が好きになるかってんだ。大体おれは――・・・！

勘違いから始まる柚樹のバイト生活。
しかも内容は「召使」。

尋常じゃない「日常」と尋常じゃない「仲間」が（柚樹を）巻き込んでおこすドタバタしすぎなコメディー！（コメディー・・・？）

ソノイチ

気づいたらこうなってた。

っていう経験はあたしいっぱい持つてるけどここまで流されたのは初めてだ。

場の空気を読めすぎるのも、いささか問題があるようだ。
かといって、あの時どうしてたら今頃こうなってたのについて言うのもあまりない。

後悔は微塵もないけど、懺悔したいことなら仰山ある。

うん、矛盾してる。

でもそうとしか言いようがない。

今、あたしは某大学に所属する天然鈍感歌って踊れる金持ちスペイン人（四分の一は日本人だけ）の家にいる。

家にいるというか住んでいる。っていうか住み込んで働いている。どうしてこんなになったかっていうと記憶がもはや曖昧だからちゃんと説明できるか自信ない。

とはいえ話は進めないとあれだから（どれだよ）がんばる。

え？あたし？

あたしは柚樹。

誰より人間関係に対してドライな男みたいな女だよ。

いちおうバイリンガルの大学一年生。

将来の夢は特になし。

はい、で例の天然鈍感歌って踊れる金持ちスペイン人はアントーニョ・ルベカーナ。

彼は……。

説明は後でする。

とりあえず、あたしは仕事があるから。

四月五日。

爽やかな、春の朝。

少しずつ暖かくなりながらも気を引き締められるような風が柚樹の首元を吹き抜ける。

腰に巻いていたニットカーディガンを羽織って大学へ続く道を歩く。今日から本格的に授業が始まる大学は、歩いて十五分くらいのところにある。

実家がカフェの柚樹は、小さい頃からその大学の学生を見ていた。そのカフェに入り浸っていた柚樹は、その学生さんによくかわいがられた。だからこの大学に入することをきめたのだ。大学の決め手なんてそんな曖昧なものだ。

まだ四月の上旬だというのにほとんど散った桜の花びらをスニーカー越しに感じる。
肩をたたかれる。

「ねえ、受験のときあったよね？」

そこにあっただのはカールをかけたセミロングをふんわりとおろし、ピンク色のグロスをぬった唇がツツヤと輝くかわいらしい女の子。本当に、女の子。

身長が百五十もないだろう、身長百七十二センチある柚樹から見たら、小学生を見ているような感覚。

それもあるのだろうが、雰囲気はTHE・女の子というかんじなのだ。

一応女のあたしにはなんとも思わないけど男の子なら少し惹かれるだろうのだろう。

「へ？」

突然そんなことを言われても、記憶力の乏しいあたしには、当然その女の子のことは覚えていなかった。

「覚えてない？席うちの前だったでしょ」

「そ・・・そうだった？」

ぎこちなく答える。

その女の子はその小さな顔をこくと上下させた。

「うん、うちあなたのこと男の子って勘違いしたまま逆ナンしちゃったの」

「・・・？」

記憶をまさぐる。

ああ、そういえば。

柚樹はそれに当てはまる出来事を思いだした。

その日は、たまたま男っぽい格好で受験に臨んだんだ。

髪も前日に「勉強の邪魔」つつって風呂場で勝手にベリーショートにしたし。

もともと男っぽい顔立ちがもっと男っぽくなったんだ。

試験がおわって、声をかけられたことは覚えている。

そのあと何があったかは何一つ覚えていないし、声をかけてきた人がこの女の子かどうか覚えていない。

逆ナンじみたことは何回もされたことあるから一々印象に残っていないのだ。

「ああ・・・まあ、そんなことあったかもね」

曖昧な返事。

でも、彼女はそれに満足したみたいだ。

「よかった！覚えてたんだ」

柚樹はうなずきかけたがここを肯定すると、少し違う気がする。

曖昧に首をかしげたがそれに気にすることなくその女の子は柚樹の手を取った。

「ねえ、うちまだ柚樹ちゃんを女の子って思えないの。だから柚樹くんってよんでいい？」

目をキラキラさせて言われても、

しかもいつてること無茶苦茶な上「女の子に思えないから」って失礼なこと言ってるし。

——が、悲しいことに、くん付けで呼ばれているのはもう慣れている。

「いいよ、別に。慣れてるし」

柚樹はそっけなくいった。

「やったー！ありがとう！」

こぶしを頬の横につけてぴょんぴょんとうれしそうに跳ねる。

「でさあ柚樹くん早速なんだけどさあ・・・」

とキャピキャピとした声で話始める。

ちよつとまで。

柚樹はあきれ気味に思った。

あたし、この娘の名前、知らない。

そんなこんなで、あたしの大学生活は始まった。

その後、その娘とメアド交換して、メアドの中に「karen」という文字があったから、カレンという名前なのだろう。知り合いから確認して、漢字も確認した。

そして、あたしの大学性生活の一日の始まりは花蓮の「ゆうきくうくん」という身の毛がよだつ猫なで声からはじまる。

「何・・・花蓮」

ただでさえ朝は弱いのに毎日この声を聞かされるとやつれる。

「今日さあ午後あいてる？」

相変わらずキャピキャピした声で聞いてくる。

今朝見た手帳の中身を思い出す。

午後は何もなかったはずだ。

「うん、あいてるけど・・・」

「よっしゃー！」

聞いたこともない腹からのガッツポーズ。お前、そんな声持ってたんだ・・・。

「合コンいこうよー！」

また違うきらきらした目で見上げられる。

まあどう彼女があがいても彼女は柚樹を見上げる形になるのだが。

——二十四センチの差は大きいのだ。

「ゴウコン……?」

言葉の存在を知ってるだけで、しかも恋愛というものに疎い柚樹にはそれは未知のもの。

「うん！合コン」

柚樹はなんだかよくわかんないまま曖昧にうなずいた。

それに花蓮は手をたたいて喜んだ。

でも、柚樹はわけがわからないまま。

ゴウコンってなに？

柚樹は花蓮のうれしそうな笑顔の手前、その言葉の真意を聞くことができなかった。

というか、次の言葉で頭が痛くなって言葉の真意を聞き忘れた。

「っていうか、柚樹くんには男の子として出てほしいの」

おま……どこまでも失礼だなおい。

ソノ二

午後三時。

バイトの安月給で買った中古の原付に乗って合コン会場に向かった。まあ、二人乗りだから違法なんだけど、最近の警察は暇じゃないらしい。

十五分ほど転がしてその中で注意されることは一回もなかった。

ついたのはカラオケ。

こちらで安くて評判の「1 HOUR FOR 123」。

名前のとおり一時間百二十三円なのだ

安いにもほどがある。

それはおいといて。

どうやら柚樹と花蓮は一番最後に着いたらしく、代表の名前を言つて案内された大部屋からはすでにドンちゃん騒ぎが起きていた。

（まだ三時なのに・・・）

半ばあきれて花蓮のためにドアを開ける。

中では、似合いもしない金色に髪を染めている青年がよく耳にするドラマの主題歌を歌っていた。

そして六人の女の子（みんな雰囲気似てて違いがわからない）そして歌ってる青年含めて四人の青年がいた。

「ああー花蓮！お久ー 元気してたー？」

「きゃー！志穂じゃあーん もおーバリバリだよー最近やっと仕事増えてきたし！」

「そっかー。ん？ところでそちらのイケメソはどなた？」

「ああー大学で学部が一緒なのー。柚樹っていうんだよお」

名前を紹介されたからとりあえず会釈。

伊達めがねがすこしずれた。

それを頭を上げると同時に直す。

「へえー、めっちゃイケメソじゃあーん。お洒落さんだし 花蓮とタメでしょ？じゃあうちお姉さんだあー、うち柚樹くん食べちゃおうかなあー」

「ちよいちよい、柚樹結構純情だからさー、優しくしてあげてよねー」

花蓮がいつもより猫なで声をより一層なつとりとさせて志穂と呼んだケバい女の子に擦り寄ってる。

「おお、柚樹つつたけ？男子チームこっちだぜー」

こげ茶に髪を染めた青年が手をひらひらと振って招いた。

——そっか、ここではあたしは男か。じゃあおれとでも自分のこと呼ぶか。

「ああ・・・はい・・・」

曖昧に会釈して手を振った青年の横に座る。

「どこ大？」

「F大学です。そこで心理学を専攻にします」

「心理学かー。え？てことは花蓮ちゃんも心理学？っていうか彼女？」

「彼女じゃないです」

質問には答えずそこをまず真っ先に否定した。

「あ・・・そなの」

柚樹の否定の清々しさに少し驚きながらも納得したような顔をする。

「まあ、今回も合コンとかいってつまみ食いの相手を探してるだけだしなあ。実際にここにいるやつ全員彼力ノいるし」

「へえ・・・」

「柚樹くんもいる？彼女」

「いえ、特にそういう人は・・・」

中学、高校と告白された経験はあるがいずれも女子の後輩だ。

しかも完璧に勘違いされたケースがほとんどだ。

二回ほど、本気で女子として告白されストーカー行為にも悩まされたがそれは警察に追放して何とか収まった。

そのため、異性と付き合ったことはないし、付き合おうという気も萎えたのだ。

しかし彼にはNOという答えが意外だったらしく、細い目を大きく見開き丸めていた。

その場は七時まで続き、七時を少し越えた頃にお開きとなった。

帰路に着いた柚樹は疲れをため息とともに吐き出した。

携帯が鳴る。

それを取る。着信を見ると花蓮からだ。

「もしもし？花蓮？どうしたの？」

「あ、柚樹？今日はお疲れー。でさあ、志穂って覚えてる？」

ああ、あのケバいい女か。

——とはいえず、柚樹はその言葉を押し込み

「うん、あのおしゃれな人・・・」

「そうそう、うちの読モの先輩。あの人がさあ、柚樹のこと相当気に入ったらしくってえ。本当は女だって言っただけどなんか『それでもいいー!』とか言ってさ・・・連絡先教えていい?」
「え・・・」

柚樹は青ざめた。

過去に同じことを言った人がいるのだ。そう、過去に柚樹をストーカーした人と同じ言い分なのだ。
が、さすがに同じ言い分だからとはいえ同じ行動に走るとは限らないだろう。

「柚樹―?どうしたのぉ?」

押し黙った柚樹に違和感を覚えたのか、少し心配の色を含めた声が聞こえた。

「え・・・ああ、なんでもない。連絡先くらいなら、うん。いいよ」

あいよーという気の抜けた返事を最後に通話は終わった。

それと同時に、柚樹の意識も途切れた。

ソノサン

——気づくと、真っ暗な部屋の中にいた。

四月にしては肌寒い空気が髪の毛の覆われていない首元を吹きぬける。指先が痺れて動かない。

頭からは生暖かい液体が滴っている。血だろうか。

柚樹は震える手で頭を押さえる。

手にべつとりとそれがついた。

それと同時に痛みが突き刺す。

——何が起きてるんだろう。

よく見たら着ていたパーカーとTシャツを脱がされ、下にきていたタンクトップだけになっていた。

ジーンズもところどころ破けている。

でも体のどこも縛られてないし気を失っている間に何かされたような痕跡もない。

広く埃っぽい部屋にただ寝かされただけだ。

小さい窓が一個だけあるその部屋はとても重い空気が流れていた。震える足で立ち上がる。

そのとき、ドアが開いた。

「おお、目覚めたか」

数人の男がドア付近に集まってきた。思考が霞む。

誰だろ、こいつら。

そのうちの一人が近づいてきて手に持っていた細長い棒状のものを振りかざし、柚樹の頭に打ちつける。

再び頭がくらくらしめてきて柚樹は床にひざをつけた。

腹が外気に晒される。

そのまま手を這わせる。

柚樹は抵抗する気力もなく、その男のされるままになる。

——これって、レイプ？

ひとつの考えが頭に浮かんた。

気を失っている間に薬でも嗅がされたのだろうか。

体が言うことを聞かない。

すこしその男の肩を手で弾いたが、それは儚い反抗でしかなくすぐにねじ伏せられる。

少し咳き込み、声を出そうとする。

ズボンを太ももまで下ろされる。

その衝動で顎が上がり準備していた叫び声がのどの奥に引っ込む。

いつの間にか壁際まで押し寄せられたようだ。

冷たいコンクリートの壁が柚樹の背中に当たった。

「た・・・助け・・・」

掠れた声が口から漏れる。

もちろん聞いているものなどいない。

もう諦めよう。

やはり、薬を嗅がされていたようだ。ますます体から力が抜けて痺れるような感覚に陥る。

どのくらい時間がたったのだろうか。

服はすっかりはがされ、下着も奪われようとされていた。そのとき、閉じていた扉がガタンと開いた。

「相変わらずくっさいなあ、この部屋。埃まみれやし・・・どうせこんな離れの小屋なんか使わんしさつさと壊しちまえばええねん。しかも何でおれにやらせんねん、せつかくいるんやから召使にやらせばいいのになあ・・・。おっ？誰や！お前ら。不法侵入やで！？わかつとんのか？」

場違いな明るい関西弁が聞こえてきた。

逆光で顔は見えない。

ただすらつとした青年ということはわかった。

「ちっ！ここ空き家じゃねえーのかよ」

男の一人が憎々しげに言った。

「そやで！ここは空き家じゃなくておれの家の一部や！」

「はあ？どんだけだだっ広い家なんだよ！」

「ここの山はおれ（おれというかおれの家族の）の所有物や！さつさと出てけ！警察呼ぶで！」

男たちはその言葉に青ざめ逃げて行った。

もちろん、柚樹はその場に置いてけぼりだ。

柚樹は男に突き倒された衝動で覚醒し、頭の靄が引いていった。まずい状況下にあるのは確かだ。

周りを探り、取られた服を見つけあわてて着る。でもジーンズは無理やり引き剥がされたからか、ボロボロになっていても着れるような状態ではなかった。

パーカーを足にかけ、そのヒーローのようにタイミングよく現れた青年が近づいてくるのを見るしかなかった。

「なんやねんあいつら・・・ここに何してたんや？まったくもおー。鍵換えんとあかんなあ」

一人でぶつぶつといいながらこちらへ近づく。

柚樹がいるところは暗がりのため、ドアが開いて光が入っていても見えにくい。

——ここで下手に話しかけたら余計に不審人物になるな。

そう考えがまとまった柚樹は身長百七十二センチの体を縮めて暗がりと同化した——しようとした。

「ふえ？誰や自分——ってうわっ、なんちゅう格好してんねん！」

その青年に懐中電灯に突然照らされ、おもわず怯む。

顔は相変わらず見えない。ただ、くたびれた白いＴシャツにこれまたくたびれたジーンズを合わせていた。

——さすがにボロボロになったＴシャツにパーカーで足元を隠してるだけじゃ怪しまれるか。

「え・・・えーと・・・」

柚樹が返答に困っていると

「自分、男やろ？そんな女々しく隠さんでええやん、どうしたん？さっきのやつらに集団リンチでもされてたん？——うわっ、血いで

とるやん。俺ん家きいや。治療してやる」

そういつて腕をつかみ、無理やり立ち上がらせる。
フラフラと足元がおぼつかない。
その弾みでパーカーが落ちる。

「「あつ・・・」」

二人の声が重なる。

二人の視線も同じところに。
パンツ。

柚樹はなぜかいやに冷静で、落ちたパーカーを拾い、腰に巻いた。

「助けていただいてありがとうございます」

そういつてお辞儀する。

「あー・・・女の子やったんや。ごめんなあ・・・」

まずそこか。

心の中で突っ込みながら「いえ」とあくまで無表情でやり過す。

「あの一・・・さあ」

その男が日没の光に照らされる。
浅黒い肌に栗色の髪。

そして――・・・

「olive eyes・・・」

オリーブ色の瞳がドアから差し込んだ夕闇の光で反射して不思議な色が生み出される。

「ふえ？なんか言った？」

「ああ。気にしないでください。で、なんですか？」

「あー・・・そのまあ聞きにくいんやけど・・・ここで何されてたん？」

「いわゆるレイプのようなものをされ『かけ』ました」

「レッ・・・」

青年が固まった。

そりゃそうだろう。

自分でさாரりと言つてのけたことにも驚いている。

「ええ」

「でー・・・えと、大丈夫なん？」

申し訳なさそうに様子を伺う。

それと同時にその青年のことまじまじと見る。

ハーフだろうか。

それとも本当の外国人なのだろうか。

大きなクリツとした目が愛嬌のある雰囲気を出す。雰囲気は青年というより少年だ。

「ええ、とくに何かされたわけではありませんし」

「そか、それならよかった」

胸をなでおろしたような様子を見せ、そつとその青年は手を伸ばし、血が固まりかけた傷口をそつとなでた。

「だいぶひどい傷やな・・・とりあえず家に来な？服もそんなんじや家帰れんやろ？」

そういつて自分の羽織っていたロングパーカーを柚樹の肩にかける。そして手を引つ張り外へ出る。

頭の痛みが再来してきて、ギョツと目をつぶる。

そこは竹林で、木で作られた橋が竹林の中を潜るように巡らせてあった。

そして、バイク。

「後ろ、乗って」

そういつてヘルメットとブランケットを投げてきた。それらをキャッチする。

「へ？」

「いや、頭の怪我ひどいやろ？うちで治療してやるてさっき言つたやろ」

さも当然のように言つたが、さすがに初対面の人にそこまでお世話になるわけには行かない。

「いえ・・・その」

「遠慮せんでええよ。大体ここ何処が分からんやろ？ここおれの（親の）所有地やし、うろつろされても困るしな」

確かに、ここが何処なのか、見当もつかない。

「素直に人の好意受け取つたほうがええで。おれ別に怪しいもんやないし」

そういつてさわやかな笑顔を浮かべ、言葉の上に質問を重ねた。

「そや、おれの名前はアントーニヨ。君は？」

「柚樹です」

「そか、柚樹。ちゃんと掴まれよ、飛ばすで」

彼のオリーブ色の瞳が夕闇に輝いた。

ソノヨソ

竹林をハイスピードで駆けるバイク。

すでに日は没していた。

ランプをつけ、夜風が出てきたなか突き進む。

アントーニヨは、後ろに乗せた少女を横目で見た。

唇の横が切れて、少し血で滲んでいる。

伸びたTシャツの襟口から見える鎖骨の辺りもかすり傷のようなものがたくさん付いている。

当の本人は珍しそうにおれの（両親の）庭をキョロキョロと見ている。

風になびく短髪がわずかに差し込む夕焼けに輝く。

さわやかな精悍な顔立ちは、女性らしさというよりは少年のような面影を思わせる。

おれの肩に乗せられた手は大きく、暖かい。

「あの一・・・」

小さいハスキーボイスが耳元にささやかれた。

「ん？なんや？」

アントーニヨは柚樹の観察を中断して返事した。

「アントーニヨさんって・・・何者なんですか？」

確かに、突然現れてこんな庭を持つてる男は怪しくてしょうがないだろう。

「ボンボンやで」

それが一番妥当な答えだろう。

「ボツ・・・」

言葉が途切れた。

ボンボンといわれて「はい、そうですか」とは反応できないだろう。

「【OLYVIA】って知ってる？」

「え。あ。はい」

有名なブランドだ。カジュアルだけじゃれたデザインが多くて、しかもリーズナブルな価格なので柚樹も愛用しているブランド。

「その社長さんの息子や」

「・・・」

絶句。

アントーニヨは苦笑した。

——そりゃそうなるやろうなあ。

そう思いながらアクセルをかけた。

数分にも満たず、家に着く。

正面から行ったら柚樹は99%追い返されるだろう。

そう考えたアントーニヨ「は裏口に向かう。

丁寧に装飾されたドアを開けてその脇にある階段を駆け上がる。

ここは裏口のようなが、それにしても広い。

「でか・・・」

柚樹はきよろきよと周りを見て啞然とした。

——裏口の玄関だけであたしの部屋くらいあるんだけど・・・

関心を通り越して呆れた。

「そか？ここから静かにな・・・」

そういつてアントーニヨは柚樹の唇に人差し指を押し付け、眉間にしわを寄せた。

無駄に広い廊下を足音を立てないように進み、一室の前で歩みを止めた。

「ここがおれの部屋や。先に入っててな」

そういつて背中を押して部屋の中に柚樹を押し込んだ。
そしてドアを閉めた瞬間。

「Cuando es Antonio, ¿d? la bien
venida a tr?s. (アントーニヨ、おかえりなさい)」

凜としたスペイン語が聞こえた。

振り向くと、母親。

「Es la madre ... ahora. (ただいま、母

さん・・・)」

この女性は、昔から苦手だ。
もちろん、自分は彼女が腹を痛めて産んでもらった実の子だ。
でも育ててもらったことはない。
ずっと乳母のもと育てられた。

乳幼児からアントーニヨが高校生になるまでほんの数回しかあった
ことがないから、今もまだ遠い親戚という感覚になるのだ。

「どこに行ってきたんですか？」

「ああ・・・離れの小屋を片付けてこいっておトンに言われたんよ。
庭の竹林におったで」

「あら。あの人か？召使に任せればいいのに」

「まあ・・・せつかくの召使を汚したくないって思ったんとちゃう
？」

「そうねえ、確かに」

そういつて彼女は踵をきつて廊下を進んでいった。

アントーニヨは安堵のため息をつき、部屋に入っていった。

「・・・柚樹？おるか？」

「おりますよ」

ドアを閉めてすぐ目に飛び込む天蓋つきのベッドの上にちょこんと
正座をしていた。

あんなに大きく見えた彼女も座ると小柄に見えるから不思議だ。

「怪我、どんな具合や？」

「だいぶ、塞がってますけど・・・額の傷はまだ血で濡れてますね」
「そか、ちよっと待っててな」

そういつてキャビネットから籐のバスケットを取り出した。
そして柚樹の横に座る。

その中からガーゼと消毒薬を取り出して手際よく傷口を手当していく。

そしてガーゼを大きめに切って患部に当ててテープで止める。

「こんなもんやろ。あとは適当に絆創膏とかでやってな」

そういつて立ち上がる。

「あの・・・」

柚樹はおずおずと口を開いた。

「なんや？服も貸すからさっさと帰ってな？」

そういつてＴシャツとジーパンを投げてきた。

それを受け取ったはいいがどうすればいいのかわからず、ぼつとしていた。

彼を見ると、後ろを向いたまま腕組をしていたので、気を使っているのかと気づき、あわててそれらを着る。

「・・・着れた？」

「はい」

そう返事すると振り返った。
それと同時にドアが開いた。

「アントーニョー！」

そこには飴色の髪の毛をアップにして群青色のロングドレスを着た女性。

「mama…」

アントーニョが呆れたというか、絶望したような表情になる。

「? Qui? n e s o e s? (そちらは誰?)」

聞いたところ、スペイン語だろうか。

その女性はアントーニョと同じオリーブ色の瞳をこちらに向け、鋭い視線を送ってきた。

しかしそれには、値踏みするようないやらしい色も含まれていた。

「えー・・・と」

「ああ、この人はおれの母親——リタや」

柚樹は少し驚いたような様子を見せた後、あわてて会釈した。それを一瞥すると、アントーニョの母親——リタは柚樹に近づき、その紅を引いた唇を開いた。

「名前は?」

「へ?」

「名前は、と聞いているのです」

「あ・・・柚樹といいます・・・」

「柚樹さんですね。何故ここにいますか?」

「えー・・・と」

さすがにレイプされかけたところを彼に助けられてここに連れてこ

られましたとはいえない。

「あー・・・こいつはここで働きたい言ってるねん」

「ふえ？」

間の抜けた返事。

アントーニヨはそれにクスリと笑う。

「ここで？」

リタがその滑らかな額にしわを寄せた。

「そや。気に食わんか？結構ハンサム思わんか？スカウトして来たんよ」

そういつて柚樹の顔を持ち上げリタに見せ付けるようにした。リタは少し近づき、再び値踏みするような目つきをした。

「ふうん・・・あなた、家事は得意？」

「まあ・・・一人暮らしなんで、一通り」

その言葉を聴くと満足そうな微笑をたたえ、うなずいた。

「そう、とりあえず明日から働いてもらうわ」

「・・・？」

話が読めないただ一人の柚樹は、口をぽかんと開けて二人の顔を交互に見ていた。

そんな柚樹を気に留めることなくリタは「じゃあ、明日からよろしく」といつて部屋を出て行った。

「話がまったく読めないんですけど」

柚樹はリタが出て行っただのを見てからアントーニョをにらみつけた。

「ごめんなあ。勝手に家に人連れ込んだいうたらあの人かんかに怒ってまうねん」

「でも・・・！」

「な！ほんまお願い！給料高くするから！結構ええで？俺んちの給料」

「いや、だから働くって・・・」

「ようは召使や」

「はあ？」

思わず声を荒げる。

「怒るのはようわかんねん！でもほんまお願い！もうここまできたら引き返せないねん！」

オリーブ色の瞳に懇願の色が見え隠れする。

「な？ほんま・・・」

「いくらですか」

「は？」

「いくらですか、給料」

「・・・望みの金額出すで？」

「月百万でどうですか？」

「ええで」

柚樹は心の中で狂喜乱舞した。

——こんなチャンスはない！

ただ金がほしいわけではない——事情があるんだよ、いろいろ。

「いいでしょう、ちなみに外国語は英語しかしゃべれませんが」
「平気やで、この召使全員日本人や」

それをきいて決意を新たにする。

「あ、そういえば」

アントーニョが思い出したように言った。

「ここでは男になってもらうで？」

——は？

柚樹はアントーニョの顔を凝視した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7079n/>

olive eyes

2010年10月10日00時23分発行